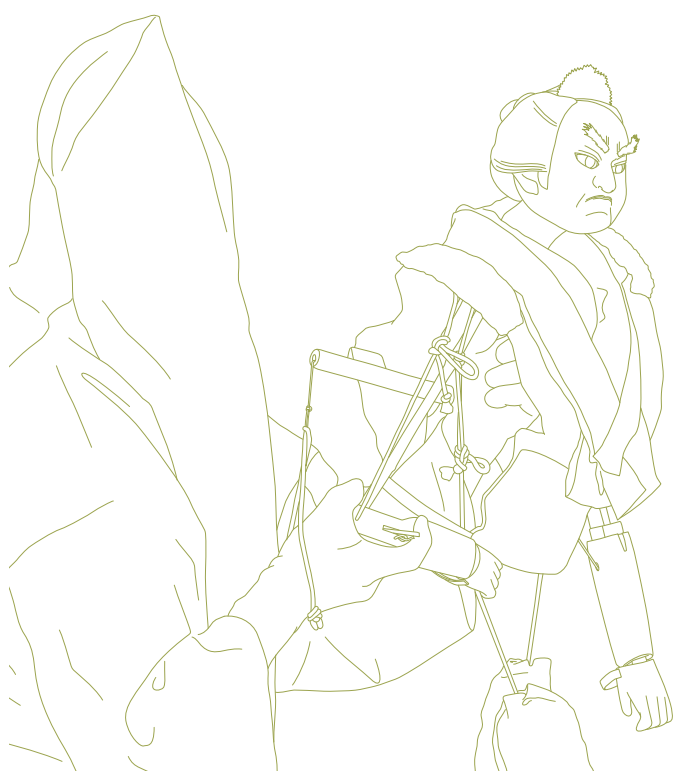


第六章

八王子車人形の特徴と価値



八王子車人形の特徴と価値

一 人形浄瑠璃史における八王子車人形

日本では、古来、多様な人形戯・人形芝居が伝承されてきた。なかでも、高い演劇性・芸術性、継承の時間の長さ、生活とのかかわり等の点からして、最も大きな存在は人形浄瑠璃であろう。

人形浄瑠璃は、江戸時代直前の十六世紀末頃、以前からあった浄瑠璃という語りの芸能と人形操りが結合して成立した。

人形浄瑠璃は大きく展開する時期がいくつかある。まず最初は十七世紀後半の、竹本義太夫と近松門左衛門の登場である。貞享元（二六八四）年、竹本義太夫が大坂に竹本座を開場し、義太夫節を創始する。竹本義太夫に作品を提供したのが近松門左衛門で、義太夫節による近松作品は、社会の矛盾をとらえその苦悩の中で生きる人間をリアルに描き、多くの人の心をとらえた。

次は、十八世紀前半、享保十（一七二五）年から宝暦元（一七五二）年の二十六年間が人形浄瑠璃の全盛期といわれる。三大名作「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」をはじめ、後世に残る作品が次々と初演される。人形も近松の頃は一人遣いであったが三人遣いが考案され、この時期の人形浄瑠璃は義太夫節の音曲的な工夫、すぐれた劇作品、人形の高度な操作・演出技法の三つを得たことで大坂の演劇界では歌舞伎を凌ぐ人気となった。

十八世紀後半は人気が下降気味になるが、十九世紀には現在でも人気の演目「奥州安達原」「艶容女舞衣」「伽羅先代萩」「絵本太功記」

「生写朝顔話」等が初演される。これらは現在各地に民俗芸能として残る人形浄瑠璃座の主要レパートリーとなっている。この頃には各地で、地元で製作された人形の首や用具類、上演記録等が数多く見られるようになる。これは人形浄瑠璃が全国へ広がり根付いていったことを物語っている。

十九世紀初め大坂では文楽の語源となった、植村文楽軒が出現し、以後数代にわたり安定した興行を続け、中心的存在となっていく。

こうした人形浄瑠璃の歴史的な流れの中から、江戸時代末頃から近代にかけて、新たに工夫を加えた人形芝居が創出される。たとえば、操り人形では大型の人形の小型化や糸の数を増やすことで、指人形では人形や指の遣い方を工夫し、これまで以上のさまざまな表現を可能にした。前者は島根県益田の糸操り人形、後者の指人形では高知県西畑人形で現在も継承されている。

車人形、乙女文楽は、新たな工夫を加えた人形芝居のもっとも代表的な例といえる。いずれも三人遣いを一人で遣うように創案された。車人形は、現在、東京都八王子車人形、同川野の車人形、埼玉県竹間沢車人形で行われている。乙女文楽は大阪や神奈川県川崎市の現代人形劇センター等で継承されている。

車人形は、現在行われているのは三か所だが、更に多くの車人形が行われていた。『国劇要覧』（一九三二年、一九四頁）によれば、多摩地方の座元として渋谷の吉田冠十郎、東京府下南多摩郡恩方村

の瀬沼時太郎、同郡横山村の丹澤彦太郎、同北多摩郡の薫森亮、埼玉県入間郡三芳村の前田信忠、千葉県君津郡長裏村の吉田冠之助、神奈川県足柄郡下中村の西川伊左衛門の七か所と人形遣いではないが後援者として尽力している八王子市の平音次郎の名が挙げられている。『東京に残る江戸・人形芝居の世界 八王子車人形』（一九九六年、二六～二八頁）では、昭和二十七（一九五二）年前後の調査として八王子周辺の座元として、八王子市小門町の小泉信久、横山村字新地の丹沢彦太郎、恩方村松竹の瀬沼時太郎、小宮地区安土の小町（田中）源三郎（西川柳寿）、と多摩村関戸の五か所があったと述べている。昭和三十年代から五十年代にかけては秋間一昇座が興行したが、秋間一昇の死と共に行われなくなった。

現在八王子周辺では、八王子車人形が唯一の車人形である。

二代目から現在の五代目まで、百三十年にわたり西川古柳一座によって伝えられてきた八王子車人形は、人形浄瑠璃の歴史から見てたいへん貴重な存在と言える。

二 八王子車人形の特徴と価値

西川古柳座には次のような特徴がみられた。

上演に関しては、第三章第七節の上演年表が示すように、たいへん盛んである。西川古柳座稽古場およびいちようホールでの自主公演、オリンピックホール八王子における八王子市教育委員会主催の「八王子車人形と民俗芸能の公演」など、会場もこじんまりした場所から大ホールまでである。海外公演は昭和五十一（一九七六）年のソ連公演に始まり、以後毎年のように行われている。世界三十か国以上の公演を重ね、訪問先の文化を視野に入れて演目が選ばれる。メ

キシコ公演をきっかけに現地の方々に親しんでもらうためにと洋舞用の新車人形が考案された。また、平成二十三（二〇一一）年のバルト三国（エストニア、リトアニア、ラトヴィア）公演では、訪問国の歴史的背景を鑑み、「わかってもらえないのでは」と、『佐倉義民伝 宗吾と甚兵衛』を上演した」と五代目西川古柳は述べている。平成二十九年（二〇一七）年よりはじまった「八王子車人形 西川古柳座公演 集大成シリーズ」では西川古柳座で繰り返し上演されてきた古典作品を中心に上演しつつ、新作も取り入れている。五代目西川古柳は「古典は残していかなければ」と力説し、令和二年一月の集大成シリーズ八回目の公演の挨拶では、演目の「生写朝顔話 宿屋より大井川の段」について「近年上演していなかったが若い座員に伝えたく、十年ぶりに取り組んだ」と述べた。「生写朝顔話」の同じ場面は、本書付録DVD所収の昭和九十年撮影の映像にも記録されており、西川古柳座の十八番ともいえる「日高川入相花王」などとは別に細く長く伝承されている演目といえよう。

「八王子車人形と民俗芸能の公演」等、行政主催の公演においては説経節の会と共演し、演目、振り付けともに八王子車人形の無形民俗文化財としての姿が再現されている。

八王子車人形は説経節以外の共演者との公演も多い。この背景は、五代目西川古柳が「八王子車人形後援会報三十四号」に述べているように、説経節の後継者がいなくなったときに、四代目西川古柳が車人形を残していくために、義太夫節をはじめ他の演奏者との共演に取り組んだことが背景にある。様々なジャンルとの共演もまた、八王子車人形が伝承されてきた所以なのである。義太夫節、新内節、落語、琵琶奏者、琴奏者らと共演を重ね、近年は創作的な演目である『シャンクス・メイアー』をニューヨークの人形遣いであるトム・リーと共演した。

本書上演記録には近年に関しては公共性の高いものみに絞り、



写真1 八王子市の小学校におけるアウトリーチ授業の様子

子市の小学生の交流事業において、平成二十三(二〇一一)年より行われている西川古柳座での車人形のワークショップは子どもたちに好評で、文化交流の役割を果たしている。

八王子市長石森孝志は令和二(二〇二〇)年一月一日の「広報はちおうじ」誌上において、「郷土愛」を感じられるまちとして発展したいという主旨の新年の抱負の中で、「八王子車人形」の若い座員が小中学校で車人形を体験していることにも触れ、「子ども時代に、郷土の文化に触れ、興味を抱くことが、未来の継承につながっている」と述べている。八王子市の「歴史文化基本構想」において



写真2 足のかかりの手入れをする五代目西川古柳。「子供たちに壊さないように、とは言いたくない。壊れたら直せばよい。かかりの先にゴムを付けたことで、舞台を踏む際の音がよくなった。」と述べている。

割愛したが、行政の支援を受けた学校でのワークショップも盛んに行われていることも注目したい。

五代目西川古柳と座員は八王子市内をはじめとする小中学校などへ年間百回以上訪れ、子供たちに車人形の紹介し、子供たちも車人形を体験する。郷土の芸能として意識づけられ、今後の伝承の基盤となる重要な機会であろう。千人同心の縁による北海道白糠町と八王

も八王子車人形は郷土の伝統芸能として主な歴史文化資源に位置づけられている。

令和元年度で十四回を迎える「伝統文化ふれあい事業 八王子車人形体験・発表講座」の発表会も、講習生が舞台で観客を前に演じる喜びを味わい、後継者育成につながっていく重要な活動である。

五代目西川古柳は、このような公演活動を通し、「まずは子どもたちに車人形を知ってもらい、ファンを育てたい。それが継承につながる」と述べている。

次に、江戸東京の人形芝居資料として価値がある。

江戸時代の終わりから明治、大正、昭和の初めまで、吉田東九郎、吉田冠十郎、西川伊左衛門という江戸東京の人形芝居の遣い手と、交流があったことで、活動記録、首、操り方等の資料が残った。江戸東京の人形芝居を物語る資料はそう多くはなく、その点貴重である。

江戸東京の人形遣いの中でも、車人形を行った吉田冠十郎、西川伊左衛門の痕跡は、山梨(笹子追分)(廣川清『三つの人形芝居』)から、神奈川まで各所に残る。『国劇要覧』(一九三二年)に記された車人形の座元は、東京都、八王子市、調布市、埼玉県三芳町、千葉県袖ヶ浦市、神奈川県小田原市に及ぶ。また、奥多摩各地にも車人形が



写真3 稽古場での公演後、観客に挨拶をする若手座員たち 2019年8月25日

流布していた。永田衡吉は、車人形が存在した地として山梨県鳴沢、埼玉県品沢も挙げている(『日本の人形芝居』五二三頁)。栃木県小山市の乙女河岸にも車人形があったという地元の伝承を最近、確認した(下野民俗研究会会長津布久貞夫氏のご教示による)。江戸東京の人形芝居の、一展開としての車人形は、関東近辺

柳より受け継いだ古い首とともに、四代目、五代目西川古柳が製作した首も使われ、大道具、小道具も自作する。衣裳に關しても西川古柳座に關わる制作者の手によるものも多い。本番の公演で用いられる用具とともに、前述の講座等において使用する練習用の首、ろくる車、衣裳も工夫されていることも初心者も車人形を体験する機会を増やし、伝承につながっている。こうした技術を生かし、五代目西川古柳は、各地の人形芝居伝承にも尽力している。



写真5 八王子市郷土資料館の車人形体験コーナー 体験用人形の首は五代目西川古柳製作、衣裳は三河恵子製作である。



写真4 若手の会メンバーの中学生 2019年8月25日

の、思いの外、広範囲で興行していたことがわかる。車人形は、江戸時代から近現代に至るまで、関東近辺までという時間と空間を考えると、江戸東京の一つの芸能文化であったといえよう。

また、古柳座は伝統と革新、それぞれの要素を保持していた。上演に關連して述べたことと重複するが、伝統的演目とともに新作にも挑んでいる。

用具類の多くを自作していることも西川古柳座ならではの特徵である。二代目西川古

三 現在の古柳座

次に、八王子車人形を継承する西川古柳座の今を伝える。



写真6 (集合写真1) 上段左より 西川柳澄之、西川柳起、西川柳香、西川柳里美、渡邊紀久代
下段左より 西川柳桂、西川柳時、西川古柳、西川柳車、西川柳久美 2019年11月10日



写真8 若手の会のメンバーに三人遣いの指導をする五代目西川古柳。首、手足、衣裳、舞台下駄すべて練習用に手作りしている。



写真7 (集合写真2) 上段左より 西川柳久美、西川柳澄之、西川柳花、西川柳車、西川柳翔、渡邊紀久代
下段左より 西川古柳、藤原ありさ、関内香水、安部晃大、西川柳玉 2019年8月24日

西川古柳座の座員は十二名、経験豊富な座員と若手座員が共に練習に励み、切磋琢磨している。また襲名はしていないが、小学校での体験授業をきっかけに興味を持ち、自主公演の舞台に立つまでに上達した中学生もいる。詳細は第三章第八節に示した通りである。三人遣いから派生した車人形をきちんと遣うためにと、座員は三人遣いの扱い方も五代目西川古柳より学んでいる【写真8】。

四 終わりに

八王子周辺で唯一、現在も行われている八王子車人形は地域的、歴史的にたいへん貴重である。

車人形はある時期に、奥多摩でも多くのところで行われていたが、現在残るのは川野車人形のみとなった。埼玉県の竹間沢は中断したが復活し現在行われている。説経節太夫・木住野清兵衛^{きすじの}によって伝えられた川野車人形の名手河村佐太郎は初代西川古柳の指導を受けている。竹間沢の神楽師前田家に古谷てい^{きよ}が嫁いだが前田家に車人形がもたらされるきっかけとなったが、ていの父親は六代目薩摩若太夫であり、養子安平も初代西川古柳の指導を受けている。川野車人形、竹間沢車人形、八王子車人形はそれぞれの土地に根差し伝承されたが、三座共に初代西川古柳の薫陶を受けた車人形が多摩地域に伝承されているのである。八王子車人形は、初代西川古柳の指導を受けた二代目西川古柳から四代目西川古柳まで織物業に携わり、平音次郎をはじめとする機業家にも支えられてきた。沼謙吉は、八王子車人形には江戸時代以来、織物で繁栄した「小江戸」とさえ呼ばれた八王子の江戸文化の名残りがとどめられているとしている(昭和四十八(一九七三)年十月二十日朝日新聞夕刊 新藤恵久所蔵)。川野車人形は、平成七(一九九五)年のおぐりサミットでは西川古

柳座と出演、竹間沢車人形は、復活後の昭和六十（一九八五）年、民俗芸能公演（埼玉県民俗文化センター）において八王子車人形と出演という具合に現代においても、交流つながらが見られる。

また、車人形は、江戸時代末頃にそれまで人形浄瑠璃に独自の工夫を加え考案された人形芝居で、人形浄瑠璃の歴史上の新展開の一つである。江戸東京の人形芝居の歴史資料として価値がある。このことから、八王子車人形のみならず、車人形としての保存継承が望まれる。

八王子車人形は、八王子市民にとっても大きな存在である。前述のとおり、学校で一度は習う身近な存在であり、多くの市民に知られており、公演回数、場所などからして接する機会も多い。八王子車人形後援会の存在も大きく、熱烈な応援に支えられ、八王子の人々に愛されている。八王子車人形は、海外でも活躍する日本の

代表芸能である一方、地元八王子の人々の日々の生活で、楽しみや喜びを与えてくれる身近な芸能である。

また、座も、代々家元自ら用具を製作し、普段は別に仕事を持った座員とともに公演を作り上げる。このような、座と観客・市民との関係は、大衆の中で生まれ育まれた芸能として重要なことと思う。地域文化への貢献も大きい。八王子車人形調査時（二〇一六年から二〇一九年まで）に



写真9 高尾山若葉まつりに参加する座員たち 八王子車人形後援会の方々も参加する。



写真10 高尾山薬王院の節分会で豆まきをする八王子車人形西川古柳座の座員たち



写真11 公演を控え、練習に励む座員たち 2019年12月

は、祭礼時の公演はみられなかったが、令和二（二〇二〇）年四月十一日に上宿の御嶽神社での「百八灯」の際に、八王子車人形の上演が予定され、約五十年ぶりの上演復活に取り組んでいることがわかる。今後も様々な意味での伝統と革新、双方を大事にしながら、ますますの発展を期待したい。

（執筆者 大谷津 早苗）